



October, 2013

## 柔道と JUDO

化学装置とはおよそ関係のない話から始めることをお許しいただきたい。

主役は、「日本柔道を救った男、石井慧」である。北京オリンピック(2008年開催)における日本男子柔道は、石井が登場する体重無差別級に至るまで、7階級中4階級で初戦敗退、取ったメダルはたったの1個というつかつてない惨敗中であった。このような窮地に、石井慧は日本柔道の威信をかけて登場することになる。

2008年2月、石井はヨーロッパ遠征をした。そこで学んだのは漢字の柔道ではなく横文字のJUDOである。JUDOを体で覚えない限り、北京で金メダルは取れない、いま世界の主流は日本の柔道からヨーロッパのJUDOに移りつつあるという確信に基づいた武者修行だった。いま世界の柔道は大きく姿を変えており、様々な種類の柔道がぶつかり合っている。相手の背中を掴んで投げるカバレリはヨーロッパで生まれた技である。

石井慧21歳いわく、いちばん勝つ奴は、力が強い奴とか、技が効いたりテクニックがある奴とか、スピードがある奴ではない。その置かれた状況にいち早く順応した奴が勝つ。例えば、信長が鉄砲の重要性に気がついたように、みんなが気がつかないところに気がつく奴が勝つ。

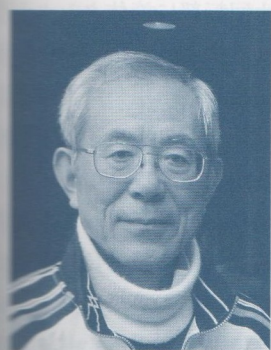
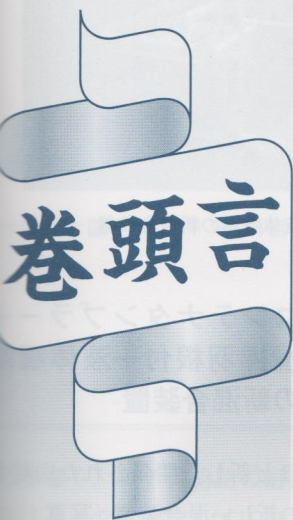
北京オリンピックが始まった。初戦はイタリアの選手との戦い。石井は先に動き回り、相手に技をかけさせない。2分過ぎに相手に指導が出、ポイントをリード。その後3分過ぎには相手のスタミナが切れ、内股で一本勝ちを収めた。つづく3回戦でもポイントをリード、最後は大内刈りで一本勝ち。準々決勝は、ロシアのトメノフとの戦い。トメノフはJUDOを代表する選手で、今年のヨーロッパ選手権のチャンピオンでもあり、石井がもっとも苦戦した相手である。JUDO対JUDO、背中を掴んで投げ技に出るトメノフに対し、石井は足取りで対抗する。攻め続ける石井、大内刈りで相手の体勢が崩れたところへ、なおも覆いかぶさるように攻め立てる。残り1分、防戦一方のトメノフについに指導が出た。残り40秒。トメノフにスタミナは残っていなかった。抑え込みで一本勝ちを収める。石井はJUDO対決を制したのである。

決勝はウズベキスタンのタングリエフ選手との一戦。ここでも石井は先に動き、組み合わず、投げ技の得意なタングリエフに柔道をさせない作戦を展開、相手に指導が出てからは守りに入り、そのまま勝利。21歳の石井慧がついに金メダルを獲得したのである。

石井慧21歳いわく、柔道の面白さは一本取ることではない。強い相手にどうして勝つか作戦を練って、10%に満たない確率を勝ちにまでもっていくことが面白い。

ロシアのトメノフいわく、自分は井上康成の柔道も鈴木啓治の柔道も見てきたが、石井は日本の他の選手と異なった柔道をする。柔道の技も力も自分の方が上だと思うが、石井にはそれを補う体力がある。石井が北京オリンピックで見せた、勝ちにこだわる柔道がいまや世界の柔道だと思う。

日本柔道は北京オリンピックに続いてロンドンオリンピックでも惨敗した。それがそのまま昨今不祥事続きの日本柔道連盟の体質を反映したものであると言わざるを得ない。日本の企業は化学工業に限らず、その時々環境変化に対応して今日までの繁栄を築いてきたと思われるが、昨今のTPP交渉などを垣間見ると、“いち早く環境に順応した奴が勝つ”という石井慧の言葉を他山の石として、改めて世の中の変化を自分なりに分析し、かつ対応することが求められているという実感がする。



村田勝英氏

豊橋商工会議所 技術顧問